

そのあと

そのあとがある

大切な人を失ったあと

もうあとはないと思ったあと

すべてが終わったと知ったあとにも

終わらないそのあとがある

そのあとは一筋に

霧の中へ消えている

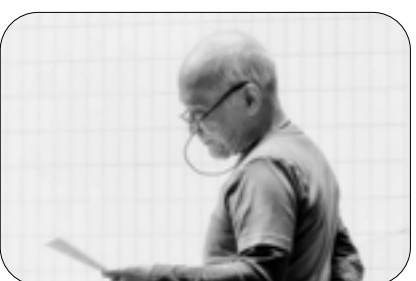
そのあとは限りなく

青く広がっている

そのあとがある

世界に　そして

ひとりひとりの心に



朝日新聞「こころ」面に掲載の詩（五年間六ヶ月）は、二〇一一年四月の一回だけ休載したが、実は谷川さんは書いていました。

「シヴァ」

書けてよかった

大地の叱責か
海の諫言か
天は無言
母なる星の厳しさに
心はおののく

文明は濁流と化し
もつれあう生と死
浮遊する言葉
もがく感情

言葉は流されなかった

破壊と創造の
シヴァ神は
人語では語らず
事実で教える



「シヨックで詩や文章が書けなくなった人が大勢いたけど、ぼくは平常心を保とう、普段と同じように生活して、普段と同じように書く」と自分に課していた。同情したり騒いだりしたくないので、詩やコメントを求められても断ったけれど、連載を休むのもおかし。書くなら触れないわけにもいかない」

「前からシヴァという神様が好きなんです。破壊と想像が一緒になったりしている。それが現実だという気がする。当時は原発事故の重大性がよく分からなくて津波の映像があふれていた。でも編集部から、今被災者が呼んだら傷つくのではないかと相談されて、引込めるのが当然だと思った」

「大震災について、メディア上でいろんな人がいろんなことをしゃべっていた。そういう言葉と東北の人たちの言葉とは次元が全然違うのがすごく印象的だった」（以上、インタビュー記事から抜粋）

*谷川俊太郎…一九三二年東京生まれ。詩人、翻訳家、絵本作家。「鉄腕アトム」主題歌や「月火水木金土日のうた」などの作詞も手がけ、現在まで百冊近い詩・詩選集などを発表している。

◆日本を代表する詩人、絵本作家の一人。御子息のジャズピアニスト・谷川賢作氏（昔、越前市や福井市、大阪などでライブに参加したことがある）との朗読コラボもされている。生死を包有しているような作品も多い。

この新聞連載の詩集の他、「かないくん」（東京糸井重里事務所、二〇一四年）という絵本も、漫画家・松本大洋氏の懐かしいタツチのイラストと相まって、温かな味わいの名著。どちらも豊かな宗教性には感銘してしまふ。

おじいさんの子供時代の回想に登場するのが、死んだ友達のかないくん。お孫さんの娘さんが、病室でもう長くないと知りつつそのことを絵本に描いているおじいさんと言葉を交わしていく。死ぬということが変わらない、いなくなること？と問う子供時代と、自ら描いてきた絵本をどう終えたらいいのか迷う病室の老人。



おじいちゃんはホスピスに入った。
「金井君の絵本まだ終わってないのに」と言ったら、おじいちゃんは「死んだら終わりまで描ける」と私の耳元で言った。

孫娘はグレンデで訃報を受け取り、白い世界を滑りながら「終わったのではなく始まったんだ」と諒解する。

死というのは決して分かっていくことはできない。命の終わりが何を意味するのか、どう受け止め、どう構えていけばいいのか。そこには人の数だけその解釈と付き合いがあるだろう。災害で犠牲になった方々のたぶん数倍の、近い人が語りうる喪失と悼みの言葉。

東北で支援活動に関わった多くの宗教者が、自ら学び帰依してきた教えの言葉はほとんど現場で通用しなかったという。神も仏もあるものかと、十年経った今でも、人によってはさらに十年後でも思うかもしれない。

絶望的な不条理に直面し、いったい何が救いになるのか、この不安定な身を支えてくれるものを人はどこかに求めずにはいられない。亡き人と自分を結びつける様々な教えや物語が、宗教それぞれに用意されている。

しかし、宗教的な真理は人間の言葉の範疇を超え、不可思議な世界や救済の働きを示すエッセンスが、仏や浄土であったり念仏や真言として現れるのかもしれない。

詩人が紡ぎ出す物語もまた、私たちの心のひだにしみ入り、日常的な物差しを揺るがしてくる。なにかしら新たな感性を開かせ、下腹に少しだけ深く息が入るような安心と、死では終わらない希望をもたらしてくれることを、この十年目に共に願いたい。（文責：報恩寺 林 曉）

